

赤い夕日

一月十五日、十六日に入試センター試験があった。

私は受験生になったつもりで取り組んでみたが、全く駄目だった。国語ぐらいはと思いい、やってみしたが、さっぱりだった。受験生がひどく偉く思えた。

写真、パソコン、もの書き、みんな子供や孫に抜かれ、ただ抜かれないのは年齢だけとなった。パソコンは三台壊し自信を失くしている。

私は現在本を買うことは殆どない。本好きの子供たちが読んだ後、次々と私の家へ運ぶのである。なかには貴重なものもあり、捨てられない。生きているうちに整理しなければと思いつつ続けている。

終戦後のニコンの第一号の写真機だけを残し、三台のニコンの写真機、レンズ、三脚などは孫が持つていき、活用している。海外での多くの写真の中にはハツとするようなものもあり、驚いている。私らの若いころと違い、指導者がいいのではないかと思ったりしている。

一昨年暮れの入院中、同室の人といろんな話をした。こんな愉快な日を過ごしたのは初めてと言う人も

いた。

鍋島という姓の人がいたので、私は眞面目な顔をして、佐賀鍋島藩主のご一族の方ではないですか、と言ったら慌てて首を横に振った。鍋島藩の化猫騒動を思い浮かべ

「罪滅ぼしのため、猫を飼ってるでしょう」

と駄洒落を言ったら

「はい、六匹飼っています」

との返事に私は驚いた。

六匹の猫のため如何に家の中が大変であるか、ると話をされた。猫の習性についてじっくりと説明も聞いた。

そんな話をしていたら隣のベッドの人が、小さな声で

「私は三十六匹飼っています」

それを耳にした途端、二人共あきれて黙り込んでしまった。猫の部屋の増築、食事、獣医さんとの連絡、その他いろいろと苦労話をされた。

旅をして記憶に残るのは名所・旧蹟などではなく、その土地の人びとと接したときの人間的交流である。東南アジアを旅したときのことである。フィリピンの田舎の人通りの少ない道ばたで、空箱の上にマンガ、バナナを並べて、辛抱つよく客の来るのを待っている少女たちを見た。マンガの好きな私は二個注文した。驚くほど安い値段であった。なんだかいじらしくなり倍の四十円を差し出すと、首を横に振り二十

円を返した。なんだか悲しくなった思い出である。

子供が親の手伝いをする、そういう風景は現在の日本ではあまり見られない。

子守り、雑巾がけ、庭掃除、水汲み、風呂焚き、かつての子供たちは家事の手助けをさせられた。赤ん坊をおんぶして学校へやって来る女の子もいた。

いまにして思えばそうやって子供たちは、何かを覚えさせられていたのだと思う。かけがえのない教育の一面ではなかったのだろうか。

○中国人墓地(マニラ)

日本の墓地を想像して行くと、それこそ度肝をぬかれる。この中国人は自分たちの墓を作るのに、莫大な費用をかけ、金を惜しまない。どの墓もコンクリートの家のように、塀あり、門あり、内部の飾りも豪華そのものである。

エアコン付きの墓などもあり、その見事さに驚かされる。この中国人の商才は見事なものであり、十代の少年が、リーダーとなって活動している店は多い。

○米軍戦争記念碑と墓地

第二次大戦で戦死した、アメリカ軍一七、一七七名の英霊がねむる地、中央の記念堂に激しかった戦闘の様相を語る“戦略図”が描かれている。マカティ地区の近くにある。

一人ひとりの立派な十字架の墓が広大な地にある。

この地で戦死した多くの日本軍将兵のことを思うと、たまらない気になる。このことについていまの私は書く気力がない。ただ涙するばかりである。

○マニラ湾の夕焼け

ロハス大通りから眺めるマニラ湾の夕焼けの息を呑むほどのすばらしさは、世界的に有名である。戦時中私はマニラ湾の夕日を幾度も見た。その度に故郷の島の夕日を思い浮かべたものである。

日本の米を十日も食わずにいたら、我慢できなくなり、香港のデパートで日本人の婦人を見つけ、米を食わせてくれる店を聞いたら案内してくれた。米、味噌汁、漬物が出た。その旨かったことは今でも覚えていいる。

宿は六十四階だったと思う。エレベーターの早さに驚き、用もないのに上り下りをやったら、ボーイが来て笑って手を出しチップを要求した。百円やったらもっと乗れと言った。

台湾では日本語が少し通じるので助かったが、外では不自由した。ゼスチャアは大分うまくなった。その時のことを話すとみんな笑うに違いないので、言わないことにしている。

年を重ねるにつれて、知人・友人らの訃報に接することが多くなった。特に昨年は生死を共にした戦友会のメンバーが次々とこの世を去ってゆき、しめつけられるような寂りよう感が私を包んだ。

人生、長生きすればいいというものでもなく、若くとも燃焼しきって完結した人生もある。歴史上偉大な実績を残した人物で意外に若い年齢で死んでいるのに驚くことがある。

人間五十年、下天の内をくらぶれば
夢まぼろしの如くなり

と、うたった信長が本能寺で殺されたのは、四十九歳であつた。作家にも立派な仕事をなし若くして死んだ人もかなりいる。

私は現在島の一隅に住み、他の人と仕事上のきびしい上下関係などない。

かつての軍隊は階級制度のかたまりで、野性的な上官、神経質な上官、頼りない上官、そのタイプはさまざまである。自分の意志を主張できない兵隊にとって、尊敬に値せぬ上官に遭遇したときほど、みじめなものはない。

昭和十九年九月十五日早暁、基隆港を出港直前、米軍機動隊の襲撃を受けた。瞬時に十八名の戦死者が出た。

十二月七日再度基隆を訪れたとき、山の中腹に供養塔を建てて、あの日の犠牲者の冥福を祈った。その折お経を上げたのがBである。

切れ目なく降り続ける細かい雨が心にしみた。

彼は僧侶ではなかったが、お経ができた。ところがお経を始めた途端、M少尉が

「おい、お経は初めと終りだけやれ、真ん中は抜いてやれ、いいか」

と怒鳴った。戸惑ったのはBである。何とも変なお経になってすぐ終わった。

戦友会の度にこのことが気になって仕方がない。生きているうちに基隆に行き、ちゃんとしたお経を上げたいと言いつづけた。

言われてみればうなずくことばかりであった。その話の中には鋭く胸を打ってくれるものがあつた。その彼が基隆を訪れることができたのは、五十一年の歳月が流れてからであつた。

現地は供養塔は引き抜かれ、跡形もなく無残なものとなつていた。わずかに数箇の石が昔日の面影を残していた。

「遅くなつてご免なさい」

そう言つた途端、涙がとめどなく溢れ、立っていらなくなり赤土の上に座り込んでしまった。

なつかしい故郷の山や河を見ることもなく、最愛の父や母に顔を見せることもなく、あえなくこの地で散つた二十代の若者たち。

彼は誰にも邪魔されることなく、泣きながらお経を読んだ。二度と来ることはないであろうこの地。

長い間の願いを果たした彼は、赤い夕日に照らされた山の斜面を、ゆつくりと、ゆつくりと歩いて降りた。

